1980年代のアンデス・ユートピア論に関する一考察

ペルー現代思想史の視点から見た評価

A Study on the Andean Utopia in the 1980s:

From the Point of View of the History of the Peruvian Contemporary Thoughts

小倉　英敬*

OGURA Hidetaka

キーワード：ペルー，1980年代，思想史，アンデス，ユートピア

KEY WORDS: Peru, the 1980s, history of the thoughts, Andean, utopia

El Perú de los años 80 se caracteriza por la severa crisis en múltiples aspectos. Se han profundizado la informalidad y occidentalización de la sociedad peruana, originando la crisis de la identidad de los peruanos. El régimen politico existente ha sido desbordado por la sociedad en crisis.

Durante la segunda mitad de la década de 1980 varios autores escribieron sobre lo andino. Entre ellos, destacan Alberto Flores Galindo, Manuel Burga y Rodrigo Montoya, quienes trataron el tema de la utopiá andina.

Esta utopía andina tiene dos características. La primera es que éstas tienen el vínculo con el proyecto socialista para el futuro del Perú; y la segunda, buscan la identidad nacional frente a la occidentalización de la sociedad peruana.

Estas manifestaciones de la utopía andina han sido enfáticamente criticadas desde varios ángulos. José Tamayo Herrera propone "la Utopía Sincrética" basada en el inkaismo. Mario Vargas Llosa insiste en el punto de vista liberal. Por su parte, Carlos Iván Degregori plantea el "Mito de Progreso."

Las manifestaciones de la utopía andina y sus críticas son los importantes intentos para interpretar la nueva sociedad peruana y formar nuevas identidad y nación de los peruanos. En este sentido el debate sobre la utopía andina tiene gran importancia en la búsqueda de la "Peruanidad."

*在メキシコ日本国大使館一等書記官　First Secretary, Japanese Embassy in Mexico

はじめに

1980年代はペルーにとって，経済的，社会的，文化的，政治的危機が深刻化した時期であった。経済的には1987年に GDP が史上最高に達したものの一人当たりの GDP は大幅に低下し，社会的には地下経済の増大，ゲリラ運動の拡大，麻薬関係活動の増加，新宗教の成長という社会のインフォーマル化が進行するとともに，西欧化が進んでアイデンティティ問題が表面化し，政治的には政治体制が社会の実情を反映しなくなり，既成諸政党が急速に支持率を低下させ，政治的エスタブリッシュメントが崩壊するに至った。正に，1980年代はペルーにとって過去の矛盾が爆発し，未来の模索に戸惑った，言わば混迷の時期であった。

このような1980年代のペルーにおいて，ペルーをテーマとした社会科学系の出版物が大量に刊行された。ベストセラーは，第一位が1986年に出版されて国際的にもベストセラーになったと言われるデ・ソト（Hernando de Soto Polar）の『もう一つの道：インフォーマル革命』，第二位が1984年に出版されたマトス・マル（José Santos Matos Mar）の『大衆の氾濫と国家の危機：1980年代ペルーにおける新しい様相』，第三位が1988年に出版されたロストウォロウスキー（María Rostworowski de Díez Canseco）の『タワンティンスーヨの歴史』，第四位が1986年に出版されたフロレス・ガリンド（Alfredo Flores Galindo）の『インカを求めて：アンデスにおけるアイデンティティとユートピア』であったと言われる。

特に，1980年代後半にはアンデス関係出版物が大量に刊行される。この中でも，前述のフロレス・ガリンドの『インカを求めて』とブルガ（Manuel Burga）の『ユートピアの誕生：インカの死と復活』が，アンデス・ユートピア論の双璧として評価されている。

アンデス・ユートピア論は興味深いテーマであるが，ペルーにおいても，我が国においてもアンデス・ユートピア論に関する研究は進んでおらず，未踏地の分野であると言って過言ではない。現代ペルーにおけるアンデス・ユートピア論は，1970年代末に議論が開始された。私見によれば，ペルーにおいて1980年代に発生したアンデス・ユートピア論は，1950年代にアルゲダス（Jose María Arguedas）やヌーニェス（Oscar Nuñez del Prado）等によって始められた「インカリ神話」の発掘や，ミジョネス（Luis Millones）によって1960年代に始められた「タキ・オンゴイ」の検証という歴史学的あるいは人類学的研究に端を発して行われた，ペルーの歴史に遡ったナショナル・アイデンティティの模索を，オシオ（Juan Martín Ossio Acuña）等が1970年代にアンデス・メシアニズムという解釈で発展させた，謂わばアンデス回帰論とも呼びうる思想傾向を発展させると同時に，1920年代にマリアテギ（José Carlos Mariátegui La Chira）によって提起された現代ペルーのナショナル・アイデンティティに基づく社会主義プロジェクトに関する考え方の延長線上で両者を合体させた思想傾向である。更に具体的に述べれば，アンデス・ユートピア論とは，ペルー史を通じて理想化されたインカ社会の復活願望が精神的傾向として見られるとして，これを

軸にペルー史の再構成を試み，更にそれをペルーの将来的なプロジェクト，特に社会主義プロジェクトと関連づける，1980年代後半に発生した思想傾向である。将来的なプロジェクトに関連づけられるが故に，また，アンデス・ユートピア論は，1970年代末以降にペルーにおいて深化した経済的・社会的危機の尖鋭化に関する意識を背景に，一種の同時代論的意味合いを持つものともなった。

本稿は，アンデス・ユートピア論が何故に1980年代後半という時代に展開されたのか，アンデス・ユートピア論とは現代のペルー社会の如何なる一面を反映していたのか，そしてアンデス・ユートピア論が1990年代後半の現在においても有効性を有するのかとの問題意識から，アンデス・ユートピア論の歴史的意味を思想史の視点から解明することを目的とする。アンデス・ユートピア論が対象とした「タキ・オンゴイ」，民衆劇「アタワルパの死」，「インカリ神話」，更にはトゥパク・アマル2世の反乱をはじめとする先住民反乱あるいは先住農民反乱も興味深く，またアンデス社会史においては重要なテーマであるが，本稿ではこれらを直接のテーマとするものではない点を予め申し添える。

Ⅰ．1980年代の思想状況

1．「アンデス的なものの再発見」

1989年6月に出版された『出会い：ペルーにおける歴史と社会運動』の序文において，歴史学者である著者のアロヨ（Carlos Arroyo）は，「今日のペルーにはアンデス問題に関連したテーマの研究への関心が増大している」と述べ，フロレス・ガリンドの前述の『インカを求めて』(1986) をはじめ，アンシオン（Juan Ansión Mallet）の『死者の片隅より』(1987)，ロストウォロウスキーの『タワンティンスーヨの歴史』(1987)，モントーヤ（Ciro Rodrigo Montoya Rojas）の『今日のケチュア文化』(1987)，モントーヤ三兄弟の『丘の血』(1987)，エスピノサ（Waldemar Espinosa Soriano）の『インカ：タワンティンスヨの時代の経済，社会と国家』(1987)，ブルガの『ユートピアの誕生』(1988)，マンリケ（Nelson Manríque Gálvez）の『ヤワル・マユ』(1988)，ドミンゲス（Víctor Domínguez）の『アンデス文化の英雄的抵抗』(1988)，バルカルセル（Rosina Valcárcel）の『神話，支配とアンデスの抵抗』(1988) と，1986年以後に続々と出現したアンデスものの潮流を「アンデス的なものの再発見」と形容している［Arroyo 1989：25］。

アロヨによれば，このような傾向は既に1970年代より社会学研究誌『アナリシス』(*Análisis*) に萌芽が見られたが，その問題意識は近代と資本主義の前進によって農村の環境が大きく変動したと見る視点にあった。アンデス志向の研究者達はこのような問題意識を継承しつつ，ロストウォロウスキーを除けばその大半の著者がマルクス主義系であることからうかがわれるように，ペルー特有の現実から社会主義論を構築してゆくとの姿勢に共通性が見られた。また，世代的には一部ロストウォロウスキーやエスピノサのような「1950年世代」もいるが，大半は「1970年世代」に属する地方出身者である。

それでは，1980年代とはペルーにとって

如何なる時代であったのか。第一に，1980年代には，1970年代末から始まった経済・社会・政治的危機が更に深刻化し，地下経済の増大，ゲリラ運動の拡大，麻薬関係活動の増加，新宗教の成長というような社会のインフォーマル化と国家の制度的解体が進み，ペルーの国家と社会との間に大きな隔たりが発生し，国家が社会に対応しなくなって，いわば政治制度としての国家が崩壊状態に達した。このような状況を背景として，国家を社会の実情に対応させるべきことを指摘する種々の著作が発表された。1980年に出版されたコトレル（Julio Cotler Dolberg）の『民主主義と国民統合』，1984年に出版されたマトス・マルの『大衆の氾濫と国家の危機』，1986年に出版されたデ・ソトの『もう一つの道』が，このような現代ペルーの側面に関して問題提起を行った代表的な著作である。これら3点のうち，『大衆の氾濫と国家の危機』と『もう一つの道』が1980年代のベストセラー4点のうち2点を占めたのは，正に国家と社会の間の断絶に関する問題提起が国民の多くの問題意識と重なったからであると言えよう。この断絶に関する問題提起に関しては，「センデロ・ルミノソ」の最高指導者であるグスマン（Abimael Guzmán Reynoso）が論じている「ペルー官僚資本主義国家」も一つの問題提起のあり方として加えておく必要があろう［Guzman 1988］。

1980年代の第二の特徴は，同年5月にセンデロ・ルミノソが，また1983年1月にトゥパク・アマル革命運動が開始した武装闘争がもたらした社会的影響である。これら2組織が開始した武装闘争は，1980年代に突発的に発生したのではなく，前記のようなペルーにおける国家と社会の間の断絶を背景としながらも，歴史的にはインカ時代以前から継続されてきたアンデス世界における構造的暴力の表面化であるという側面があることも認識する必要があろう。そして，この1980年代における政治的暴力の現象が，主にアンデス農村及びその延長線上にある都市部の貧民街から発生した。センデロ・ルミノソとトゥパク・アマル革命運動の武装闘争は，ペルーの近代化プロセスの中で置き去りにされてきた底辺層が，彼らを排除し続ける既成支配体制に対して攻撃を仕掛けてきたことにその本質がある。センデロ・ルミノソやトゥパク・アマル革命運動による武装闘争は，知識人にどちらの側に立つのかとの選択を迫った。従って，1980年代においてペルーの知識人層は，自らの存在をペルーの現状と如何に関係づけるかとの問いに答えることを迫られた。「アンデス的なものの再発見」は，このような環境の中で探求された。それはペルーのアイデンティティをアンデス世界を基盤に形成しようとする努力の現れであったと評価しうる。

第三に，このような「アンデス的なものの再発見」の努力の更なる背景として，1980年代にはペルーにおける西欧化が更に進んだことを指摘しておかねばならない。「アンデス的なものの再発見」の試みは，このような西欧化の進展の中で，過去のペルーの歴史においてアンデス世界及びアンデスの人々が果たしてきた役割を正当に評価しようとする試みであった。即ちそれは，ペルーの国家が，スペインによる植民地化以降，ヨーロッパ系の人々によってその基

盤が形成されてきたのではなく，彼らは自らに好都合な「狭義の」国家を形成してきたにすぎず，真のペルー国家は，アンデス出身の先住民系の人々によって形成されてきたことを歴史的に証明する努力であった。従って，歴史，人類学，及び考古学においても，既成寡頭支配層によって蓄積されてきた既存の学問の枠を乗り越える，新しい枠の建設が1980年代に行われたと言える。

2．「チョロ化」論

ペルーにおいては1940年代以降，極めて急激な社会的変化が生じてきた。その発端は，1890年代に開始した山岳部農村から都市部への人口移動であり，この人口移動は1940年代から本格化し，1950年代には人類学者や社会学者の間でペルー社会の「チョロ化」と評される現象を生じさせる*1。リマ首都圏（リマ市とカヤオ市）の人口は1940年には66万人であったが，1961年には190万人，1972年には342万人，1981年には484万人，1993年には643万人へと急激に増加した。

この都市部における人口増大の大半は，アンデス山岳農村部からの国内移動，及びその後の2世以下の誕生を原因としている。都市部に到着した地方出身者は，敵対的な環境の中で生き延びる方法を模索した。まず，住宅については都市中心部の旧市街にあるトゥグリオ（Tugurio）と呼ばれる古い建築の多家族居住家屋に仮住まいし，その後集団を形成して，主に都市周辺部の砂漠上の土地に不法占拠によって簡易住宅を建設していった。リマ市内に最初にできた民有地の不法占拠によって形成された新興簡易住宅街は，1946年に形成されたビクトリア区サンコスメ地区である。その後，リマ市郊外の砂漠上に簡易住宅街が出現してゆく。これらの都市周辺部の新興住宅街の呼び方は時代の経過とともに，バリアーダ（Barriada），プエブロ・ホベン（Poeblo Joven），アセンタミエント・ウマノ（Asentamiento Humano）と変化してきた。これらの新興住宅街の特徴は，これらの地域がスラム街ではなく，発展する地域であるとの事実にある。街の形成から10年，20年，30年と経過すれば，植物性のエステラ造りからレンガ造りの家へ，また1階建てから2階建て，3階建てへと発展し，家内工業から中小企業が発生していった。今日のペルーにおいて非伝統産品輸出のトップを占める衣料品製造工業はこのような環境の中から成長した。

都市部に到着した者が，生活のために最初に始める金稼ぎは露天商（Ambulantes）である。その後，小資金を蓄積した者が家内工業，タクシーやマイクロ・バスの経営に移っていった。他方，文化的には，アンデス農村地域の文化を継承し，他方で都市の西欧化したクリオーヨ文化を吸収しつつ，

＊1　チョロとは，先住民社会に起源を発しつつも，都市部に移動することによって，クリオーヨ文化（現地化したスペイン系文化）と接触して，先住民文化からもクリオーヨ文化からも自立した文化を形成した層であり，現在のペルーにおいて国民の70パーセントを占めるものと推定される。人種的には先住民及びメスティソを網羅する。現在のペルーを象徴する文化的諸要素の大半はチョロ文化に識別される。チョロ文化はクリオーヨ文化から自立した文化であると規定すべきではあるが，クリオーヨ文化と混合する場合も多く，その意味でチョロ文化は一時的現象であり，いずれはクリオーヨ文化に吸収されると主張する人類学者もいる。

これら二つの文化を融合しつつもこれらから自立してゆく所謂「チョロ」文化を形成した。これが，ペルー社会の「チョロ化(Cholificación)」と形容される現象である。

「チョロ」という言葉は植民地時代のかなり早い時期から使用され，主に蔑称として用いられた。その語源については種々の説があり定説はない。また，その意味も，植民地時代においてさえ変化したが，植民地時代後半から20世紀初頭までの間には，一般に下層メスティソに対する蔑称として使用されたが，その後アンデス農村出身者で，都市に到着するとともに「チョロ」文化の担い手になる階層，及びその子弟で「チョロ」文化に属する人々を指すことになる。こうして，「チョロ」の意味が人種的混血を表わす言葉から，文化的融合の結果として新たに形成された自立的な新文化に属する人々を指す言葉に変化した。但し，蔑称的な意味が今もこめられているため，「チョロ」層が自らを「チョロ」と自認することは稀れである。

この「チョロ」及び「チョロ化」現象が学問的に取り上げられたのは1950年代末からであり，その理論化は1960年代から始まった。1960年代の代表的な「チョロ」論あるいは「チョロ化」論として，バラヤノス(José Varallanos)，キハーノ(Anibal Quijano)，及びフランス人人類学者であるブリコー(Francois Bourricaud)を挙げうる。バラヤノスは1947年に執筆し始めた『チョロとペルー』と題する著作を1962年に出版し，その中で「チョロは文化的メスティソ化の主役である」と述べ，「メスティソ化はペルーの将来で」，「不可避的で運命的な現象である」とペルー社会の「チョロ化」を予見した上で，1950-60年代に進行しつつあった社会的変化を「リマのペルー化が進行している」と形容した[Varallanos 1962: 106]。ブリコーは，1954年に発表した「現代ペルーにおけるメスティソ文化の諸特徴」と題する論文でチョロとは「メスティソ化の道にあるインディオ」であると定義し[Bourricaud 1954: 171]，1967年に出版した『現代ペルーにおける権力と社会』においてチョロとメスティソを混同してはならないと指摘した上で，チョロを「上昇過程にあるメスティソ」と定義し直した[Bourricaud 1967: 62]。ブリコーの1954年における定義と1967年における定義には相違があるが，それはブリコーが研究対象としたプーノ県における「チョロ」の現象が，1950年代から1960年代に変化したためではないかと見られる。即ち，1950年代のプーノにおいては「インディオ」のメスティソ化が顕著であったが，このようなメスティソ化した「インディオ」は1960年代には社会的に上昇過程に入ったとの見方をブリコーは示そうとしたと見ることも一つの見方であろう。そして，ブリコーは1970年に発表した「チョロ化」と題する論文においてチョロを「急速な変化期にある社会において，その変化に応じられる」存在であると論じた[Bourricaud 1970: 198]。

他方，キハーノは1964年に「チョロとペルーにおける文化的抗争」と題する論文を発表，その中で，「ペルー社会は極めて活発な変化のプロセス」にあるが，顕著な特徴として「チョロ化」が進行していると指摘するとともに，先住民系文化にも西欧文化にも「統合されることへの抵抗」を軸と

してチョロ集団が発生しつつあるとの「チョロ化」現象の理論化を行った。そして，キハーノは「クリオーヨ化の枠内での先住民系の単なる全体的な文化的変容とは異なるペルーの未来」が予見しうるとし，「チョロ・グループの発生はペルーにおけるメスティソ文化の発展の可能性を開くものであり，この傾向が発展すれば，これがペルーのネーションの発展の道であると肯定することが可能になろう」述べた［Quijano 1980：47-77］。このように，山岳部農村地帯のアンデス世界から先住民系の人々が都市部に到着することによって，先住民系文化とクリオーヨ文化の融合から，いずれよりも独立した「チョロ」文化が形成され，その延長線上にペルーのネーションが形成されることが，早くも1960年代に期待されていたのである。

このような「チョロ」論あるいはペルー社会の「チョロ化」論は，1980年代に更に発展される。キハーノの前掲の論文が1980年に再版された他，1985年にはフランコ（Carlos Franco Cortes）が雑誌『社会主義と参加』第29号に「ネーション，国家と諸階級」と題する論文を掲載，「ペルーのナショナル・アイデンティティはもはや問題でも可能性でもない。ペルーは文化的にはチョロの国である」と述べ，アイデンティティ形成は終了したと主張した［Franco 1991a：37］*2。

1980年代には，このような「チョロ」論が大方の知識人の問題意識と重なり，「リマのペルー化」，「リマのアンデス化」，「ペルーのペルー化」，「ペルーのアンデス化」なる言葉が頻繁に使用されるようになる。それは，表面的な西欧化の裏で，ペルーが先住民系のペルー人によって再征服されつつあるとの認識を意味するものであった。そして，このような傾向は，アンデス世界の人々がペルーの真の国家形成に果たしてきた役割を究明しようするアンデス関係出版物のラッシュと現象的に対をなすものであり，問題意識において重なるものであると評価しえよう。

それとともに，このように1940年代に始まって，1950年代以降に急速に進行したペルー社会における変化を認識し，国家がこのように劇的に変化したペルー社会の現実に対応していないとの議論が高まり，その結果前掲のコトレルの『民主主義と国民統合』，マトス・マルの『大衆の氾濫と国家の危機』，デ・ソトの『もう一つの道』等の著作で問題提起が行われ，ペルーにおける変革の必要性が主張された。

II．アンデス・ユートピア論

1．「アンデス・ユートピア」の定義

アンデス・ユートピア論としては，類似の問題意識をメシアニズムとして取りまとめたオシオやユートピア思想と評したウルバノ（Henrique Oswaldo Urbano）による1970年代の先駆的な労作を挙げることができる。しかし，「アンデス・ユートピア」との名称によって，改めてペルー史を通じてインカ社会の復活願望が精神的傾向として見られるとして，これを軸にペルー史の

＊2　フランコの論文「ネーション，国家と諸階級」は1991年に出版された『もうひとつの近代性』の中に収録されており，本稿では同書に収録されたものを用いた。

再構成を試みるとともに，それをペルーの将来的なプロジェクトと関連づけたのは，フロレス・ガリンドとブルガであった。

1989年3月に若くして癌で亡くなったフロレス・ガリンドはブルガとの共著にて，1982年に研究誌『アルパンチス』（*Allpanchis*）第20号に論文「アンデス・ユートピア」を掲載した。その後，フロレス・ガリンドは1986年に『ヨーロッパとインカの国：アンデス・ユートピア』と『インカを求めて』を，1988年に『疫病の時代』を出版した。他方，ブルガは1988年に『ユートピアの誕生』を出版し，1990年に論文「ユートピアとしてのアンデス的なものの発生」を執筆，現在もなお18世紀におけるインカ貴族的なアンデス・ユートピアの存在を歴史的に検証し続けている。他方，人類学者であるモントーヤは，1991年12月に発行された雑誌『マルヘネス』（*Márgenes*）第8号に，近々出版予定の『アンデス・ユートピアからマジック的社会主義へ』と題する著作の一部を構成する「アンデス・ユートピア」と題する論文を発表してアンデス・ユートピア論を展開し始めた。ここでは，これら三者のアンデス・ユートピア論の共通性と相違性を指摘することで，「アンデス・ユートピア」論の内容を整理し主要な特徴を指摘したい。

まず，1516年にトマス・モアが同名の著作を出版した際に創造した「ユートピア」という言葉に関し，フロレス・ガリンドは，この言葉は「通常の言語では不可能と同義語であり，……日常的な骨折りから隔絶した実現不可能な思想」を意味する［Flores Galindo 1986 a : 24 ; 1994 : 22］*3 が，しかしアンデス・ユートピアは，インカ社会が正義と平等を備えた実際に実在した理想社会である故に，「既に存在したことのある（再現）可能なもの」であると述べた。フロレス・ガリンドは，そこにヨーロッパとアンデスにおけるユートピアの意味の違いがあると指摘する［Flores Galindo 1988 : 249］。すなわち，フロレス・ガリンドにとってアンデス・ユートピアとは，既に存在したことのある理想社会の再現を目指す精神的傾向を意味する。そして，フロレス・ガリンドによれば，アンデス・ユートピアはスペイン期前のアンデス的な概念ではなく，スペインによる征服を通じたヨーロッパ文化との接触から生じた。例えば，アンデス・ユートピアは千年王国論的にも，メシアニズムにも現れるが，それはアンデス世界の思想がキリスト教的要素を融合したからである。言い換えれば，アンデス・ユートピアは「征服に対する一つの回答であり，自然発生的に無意識的に西洋社会に対する選択肢を定式化するための，西洋的要素の統合であり，また西洋的要素の再生でもあった」［Flores Galindo *et al.* 1996 : 242-243］*4。

ブルガもフロレス・ガリンドと同様に，アンデス・ユートピアがスペインによる植民地化の過程で発生したものとする立場から，アンデス・ユートピアを「植民地的産物」であると見る。そして，アンデス・ユートピアを「スペイン人によって破壊，征

＊3　フロレス・ガリンドの「インカを求めて」は1986年にキューバのカサ・デ・ラス・アメリカスから初版が出版された。本稿では1994年にペルーのホリゾンテ社より出版された第4版を用いた。

服された先住民社会の復活を希求する社会的な態度及び行為の全体である」と定義し，直接的に明示的に表わされたもののみでなく，儀式・祝祭等に表現された集団的な無意識に保持されているものをもアンデス・ユートピアの現れと見る。しかし，フロレス・ガリンドとの違いは，植民地的産物であるとの意味を，否定的にのみ使っているのではなく，ヨーロッパの思想やヨーロッパ的な思考様式，そしてキリスト教が，アンデス世界の人々に歴史的なユートピアを定式化することを可能にさせたのであり，このようにしてアンデス・ユートピアは「思想の自立性の一形態」として発生したのであると主張する［Flores Galindo *et al.* 1996：240］。

フロレス・ガリンドが植民地時代のペルーに発生したアンデス・ユートピアの形態として，千年王国論やメシアニズムと表現することを否定しないのに対して，ブルガはこれらの二つの形容方法は，キリスト教的概念に基づくものであり，キリスト教が十分に浸透していない17世紀に発生したアンデス・ユートピアの諸形態を千年王国論やメシア論と形容することは誤りであるとして，表現を「アンデス・ユートピア」に統一する。しかし，ブルガは，西欧的なものを排除している訳ではない。その点においてはブルガもまたマリアテギの後継者であり，西欧的なものを完全に排除するのではなく，西欧的なものとアンデス的なものの融合の上に，ペルーのナショナル・アイデンティティの形成を考えた［Burga *et al.* 1989：156］。それは1920年代にマリアテギが西欧的なものとの出会いにペルーの発展の可能性を見た立場に一致する。

モントーヤは，論文「アンデス・ユートピア」において，アンデス・ユートピアとは飢餓や苦痛なき社会として考えられたインカ社会の復活願望であると定義する［Montoya 1991：36］。そして，インカ帝国はスペインによる征服によって消滅したのではなく，1780年にトゥパク・アマル2世の反乱が挫折し，インカ貴族層が消滅するまで継続したと述べ，インカ社会復活願望を代表したイデオローグとしてインカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガとワマン・ポマを挙げる。そして，モントーヤは，フロレス・ガリンドやブルガと同様に，インカ社会の復活はすべてのスペイン的なものの否定を意味するものではないと述べ，またインカ時代への復帰願望はアンデス世界の時間及び空間に関する概念に基づいていると主張する［Montoya 1991：64］。

2．アンデス・ユートピア論者の「アンデス的なものの再発見」に関する見方

ブルガは「アンデス的なものの再発見」と称される現象が1980年代後半に出現した

＊4　本稿ではスペイン語の“Occidente”及び“Occidentalizacion”を，スペイン語におけるニュアンスの違いをより正確に表すために，場合に応じて「西洋」，「西洋化」，及び「西欧」，「西欧化」と区分した。「西洋」及び「西洋化」については，先住民社会がスペインによる征服を通じて広範な意味での西洋文化との出会いに言及される場合に使用し，他方「西欧」及び「西欧化」については植民地時代及び１９世紀の初期共和制時代を経て，スペイン文化の土壌の上に浸透した西欧文化及び米国文化の影響に言及される場合に使用した。「西洋化」の場合には，キリスト教，特にカトリックとの接触が含まれるのに対し，「西欧化」の場合には，西欧文化及び先進技術との接触が重要な要素となると考えられる。

理由として，次の三点を掲げている。第一に，西欧世界に対する選択肢としてアンデス世界が提起されている点，第二にペルーがナショナル・アイデンティティの模索を継続している点，第三にヨーロッパのルネッサンス時代にギリシャ・ローマ世界が評価されたことと同様な思想的試みがなされている点である［Burga *et al.* 1989：156］。

他方，フロレス・ガリンドは，「アンデス的なものの再発見」と称される現象について，「現代のペルーにおいて，社会的・政治的のみでなく，文化的に極めて強い抗争が存在している。……これらの文化的抗争が，アイデンティティ問題を提起し，この憂慮が歴史的な模索と探求を付託した」と説明する。このような問題意識はモントーヤにも共通して見られるものであるが，フロレス・ガリンドは，アンデス世界からの人口移動は「アンデス文化の消滅をもたらしたのではなく，寧ろ都市のアンデス化あるいは都市部の文化的諸要素の再創造をもたらした。……アンデス的なものは，シエラに限定されない」と述べ，アンデス世界からの人口移動がペルーのアンデス化をもたらしたと主張した［Burga *et al.* 1989：145］。これに対しモントーヤは，ペルー社会のチョロ化現象を指摘する傾向に対して，「リマにおいてアンデスからの移民が全面的にアンデス文化を再生しているとよく聞くが，それは真実ではない。……都市は移民を吸収してしまい，アンデス的なものの再生は断絶される」と反論し，アンデス世界には近代に対抗する姿勢は見られないと主張，それ故に，アンデス世界は現在の文化的支配が維持され続ければ消滅することを宣告されていると述べる［Montoya 1987：18］*5。しかし，モントーヤはアンデス的な要素が消滅するとは述べている訳ではなく，寧ろアンデス文化の基本的要素である「互恵」の精神と「共同労働」の習慣はアンデス・アイデンティティの基盤として生かすことができると主張し，複数の文化間の共存に基づいたペルーにおける社会主義を提案した［Montoya 1987：66］。ここにモントーヤにおけるアンデス・ユートピアと社会主義プロジェクトの接点が存在する。

3．社会主義プロジェクトとナショナル・プロジェクト

フロレス・ガリンドは，スペイン期前のアンデス的なものが如何にしてアンデス・ユートピアに転化したのかにつき，その契機はタキ・オンゴイであったと主張している。タキ・オンゴイとは，1564年から1572年頃までの間に，アヤクチョ地方から発生してクスコ，アレキパ，そしてリマ近辺ま

＊5　本稿においては，スペイン語の“Moderno(a)”“Modernidad”“Moderización”をそれぞれ「近代の」，「近代性」，「近代化」と訳したが，“Moderno(a)”が社会主義を形容する場合のみ，「現代社会主義」と訳した。本稿において，フロレス・ガリンド，バルガス・ジョサ，デグレゴリからの引用部分に現れる「近代」，「近代性」，「近代化」の言葉が意味するところは，共通して，「近代」を批判精神，合理主義，発展段階論，自由主義，人間中心主義などに特徴づけられる西欧近代を中心とする概念である。フロレス・ガリンドのように「近代」を否定的に捉えている場合には，西欧型思考様式を，バルガス・ジョサやデグレゴリのように肯定的に捉えている場合には，合理主義，先進技術を主に内容としているものと考えられる。
　ペルー人研究者における「近代」の捉え方については，参考文献に含まれているウルバノの論文「アンデスにおける近代性」，及びフランコの論文「もうひとつの近代性」が参考になる。

で広がったとされる，スペイン及びカトリック教を拒絶し，アンデス古来の宗教観への回帰を希求する，聖所であるワカを崇拝対象とした舞踊を伴う宗教現象であった[Varon 1990: 332-333]。また，1555年にポトシで上演された民衆劇「アタワルパの死」や1572年のトゥパク・アマルの処刑後に生まれたインカリ伝説を通じて，インカ社会復活願望はクスコ地方のみならず，ほぼ旧インカ帝国の全域に広がり，こうして，フロレス・ガリンドによれば，インカ社会を理想化してその復活を願うアンデス・ユートピアが誕生する。このアンデス・ユートピアは，1742年のフアン・サントス・アタワルパの反乱にも，1780年のトゥパク・アマル2世の反乱にも，1805年のアギラルの反乱にも，20世紀初頭の先住農民反乱等にも，インカ社会の復興を希求する志向性として見られた。

フロレス・ガリンドにとって，アンデス・ユートピアはインカ社会を平等で公正な社会として理想化したものであり，彼はこれを将来的なペルーにおける社会主義の建設と結び付ける。フロレス・ガリンドは，「過去への回帰ではない発展モデルは，過去の諸要素と現代社会主義を基礎にすれば，発展の異なる選択肢の建設になる」と述べ，ペルーにおいてはアンデス・ユートピアが存在するが故に，これがペルー型社会主義の性格を特徴づけるものと主張する[Flores Galindo *et al.* 1996: 236-237]。このような主張は，1920年代にマリアテギがペルーにおける社会主義の特徴をペルー社会の特殊性を反映したものでなければならないと主張した姿勢と一致する。ペルーの特殊性を反映した社会主義論は，1980年代後半においても未だ形成されるに至っていなかった。ペルーにおける左翼運動は，1970年代末期より急激に成長し，合法路線と武装闘争路線に分岐することになる。合法路線は1980年代には得票率においては20-25パーセントを代表する勢力に成長する。この合法路線の中で特にペルー型社会主義の建設を強調したのは，1984年に旧革命的前衛系（Vanguardia Revolucionaria）諸派と旧革命左翼運動系（Movimiento de Izquierda Revolucionaria）諸派が合同して結成された統一マリアテギスタ党（Partido Unificado Mariateguísta）であった。同党は合法左翼勢力の三分の一を代表する党であり，これにフロレス・ガリンドも知識人の立場から参加した。フロレス・ガリンドのアンデス・ユートピア論は，彼のペルー型社会主義を模索する営為として提起したものであった。

フロレス・ガリンドは，アンデス・ユートピアが現代社会にも継承されており，これがペルーの社会主義プロジェクトの形成において考慮されなければならないと主張する。彼は，「社会主義プロジェクトのために何を汲み取ることができるだろうか。社会主義は単に思想を必要としているのみではない。おそらくその前に，集団的なパッションが求められる。如何なる社会主義プロジェクトもその国の歴史を排除することはできない。マルクス主義が成功した革命を促した秘訣は民族的な伝統と合体する力にあった」と述べ，社会主義プロジェクトはその国の民族的な伝統と合体しなければならず，これによって運動を爆発させる「パッション」が確保されると主張する[Flores Galindo 1994: 252-253]。このよ

うな姿勢にもマリアテギの姿勢との類似性が強く見られる。マリアテギはこのような革命運動を盛り上げてゆくパッションを「神話」と表現した。

しかしながら，フロレス・ガリンドはアンデス・ユートピアが革命へのパッションになりうるものと考えたが，アンデス・ユートピアにおいて復活を願望されたインカ社会をそのままペルーの将来的な社会主義モデルと考えた訳ではない。インカ帝国が征服的で専制的な国家であったことは種々の研究で明らかにされている。彼は，「アンデス・ユートピアを延長することを提案しているのではないことは明白である」「集団的なアイデンティティを創造し，社会を変革させることを可能にするような異なるユートピアを考えることが必要である」と述べる。また，アンデス・ユートピアは過去，現在，及び未来という時間的な流れの中で捉えられるべき思想であるとして，「三つの次元を有している」と述べ，更に「アンデス・ユートピアは単に過去を理解し，現在に対して選択肢を提供するだけの努力ではなく，また未来をもたらす試みである」と述べている［Flores Galindo 1994:72］。このようなフロレス・ガリンドの過去を歴史的に再構成してそれを未来に反映させようとする視点は，西欧的な単線的発展史観を拒否して，アンデス世界に存在した循環的歴史観を意識したものと見ることができるのではなかろうか。

フロレス・ガリンドは，前述のように，1980年代のペルーにおいて文化的抗争が激化したと指摘しており，伝統と近代性の対立が，アンデスと西欧文化の対立という形で尖鋭化したと主張し，アンデス・ユートピアは「ヨーロッパの侵入を忌避しこれを拒否する意味を有する」，「西欧的なモデルや西欧世界によって着手された近代化プロセスを拒否する意図を意味する」，「西欧モデルを問題視し，他の可能な道を模索することに貢献する」と述べる。そして彼は，ペルーの伝統と現代社会主義の融合の中にペルーの将来を託そうとし，「可能性があるのは，西欧的な原型ではなく，伝統世界の幾つかの諸要素を取り入れたペルー社会の発展モデルの可能性を提起することである。過去への回帰ではない発展モデルは，過去の諸要素と現代社会主義を基礎にすれば，発展の異なる選択肢を建設できる」と論じている［Flores Galindo *et al*. 1996: 237］。フロレス・ガリンドは，ペルーの将来的な理想社会を社会主義社会と考え，それを正統化する論理として，自らが理想化したインカ社会の諸要素と，現代社会主義を融合させるのである。即ち，フロレス・ガリンドにとっては，伝統的諸要素のみでは十分ではなく，更に現代社会主義をこれに融合させる必要性を提起するのである。その意味において，フロレス・ガリンドはマリアテギの思想を継承していると言える。

他方，ブルガもペルーの社会主義化を肯定する。しかし，ブルガの場合には，社会主義化を肯定しつつも，アンデス・ユートピアに関しては，ナショナル・プロジェクト形成の基盤に考える。即ち，ブルガにとっては，ペルーにおけるネーション形成が第一義的に重要な課題であり，これを達成するとの目的意識から，ナショナル・アイデンティティを模索する道としてアンデス・ユートピア論を展開する。ブルガは，1988年に出版した『ユートピアの誕生』の

中で，リマ県カハタンボ郡マンガス村に継承されている舞踊「マルシャ」に民衆劇「アタワルパの死」が変形された形で1980年代に至るまでも伝承されている例を挙げるている。そして，このことからアンデス・ユートピアの意味に関して問題提起し，サンタクルス・パチャクティ，ワマン・ポマ，インカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガを思想的背景とした17世紀の先住民におけるメンタリティの変化につき詳述する。しかし，ブルガは，アンデス・ユートピアの存在を17世紀に限定している訳ではない。彼が17世紀を強調したのは，アンデス・ユートピアが有した強度についてであり，アンデス・ユートピアは現在も生きており，それ故にこそブルガはナショナル・アイデンティティを模索する道としてアンデス・ユートピアの重要性を指摘しているのである。

モントーヤは，前述の通り，大半の「チョロ化」論者がペルーのアンデス化に関して楽観的な見方をしているのに対し，自立的な「チョロ」文化の形成を認めず，アンデス的なものは国内移民が都市部に到着した時点では持続されるが，2世や3世の時代になれば都市部を支配する西欧文化を基礎としたクリオーヨ文化に吸収されてしまうという悲観的な見方を示した［Burga *et al.* 1989 : 154］。モントーヤは，アンデス文化は西欧文化に吸収されて消滅してゆく可能性があるものの，文化的共存を図ることは可能であると主張，そのような社会はアンデス的な「互恵」の価値観を基盤とすることで成り立ちうると論じ，未来に向けたプロジェクトとして提起し，社会主義との合流を主張する。

このように，フロレス・ガリンド，ブルガ，モントーヤのいずれもが，論理や程度の相違はあれ，アンデス・ユートピアを，あるいは「アンデス的なもの」を社会主義プロジェクトと結び付けた。

4．アンデス世界と西欧化

次に，アンデス世界が西欧化に対して如何に対応し，変容していったかについて，フロレス・ガリンド，ブルガ，モントーヤがどのように述べているかを，一部重複することになるが整理しておきたい。

前述の通り，フロレス・ガリンドは，「現代のペルーにおいて，社会的，政治的のみでなく，文化的にも極めて強い抗争が存在している。……これらの文化的抗争が，アイデンティティ問題を提起し，この憂慮が歴史的な模索と探求を付託した」と述べ，現代における文化的抗争の激化がアイデンティティ模索を促進していると主張，そして，アンデス世界からの人口移動がペルーのアンデス化をもたらしたと述べた。このフロレス・ガリンドの主張は一見，アンデス世界の住民のコスタ都市部への人口移動によってペルーがアンデス化されたとの，楽観的な見方をしているかのように見える。しかし，フロレス・ガリンドの主張の裏に，西欧化の波の激しさに対する懸念が強く感じられる。

ブルガは，前述の通り，「アンデス的なものの再発見」が1980年代後半に評価された第一の理由として，西欧世界に対する選択肢としてアンデス世界が提起されていると述べた。しかし，ブルガはアンデス・ユートピアを擁護しているのは都市部の知識人であり，農民自身は西欧的なものにより魅力を感じていると述べ，「農民は西欧的

であろうとしている」あるいは「農民は明示的には西欧的なものに傾きがちである」と述べている。ここで注目すべきは，「明示的に」のみ西欧的なものに傾きがちであると述べている点である。ブルガの本心は寧ろ，「農民は潜在的にはアンデス的である」，「ペルーのアンデス化と呼ぶことができる支えは，アンデスの物質的なあるいは精神的な価値観への復帰である」と述べているところにある。その理由として，時間を循環論的に秩序だてるアンデスの精神性を指摘している点に注目すべきであろう。しかし，ブルガは「農民」について極めて抽象的に述べているし，農民がなぜに循環論的な歴史観を有し，それが西欧的なものよりもアンデス的なものに回帰する傾向をもたらしている理由につき何ら語っていない。いわば抽象論の域を出ていない。

モントーヤにおいては，アンデス世界が西欧化を前に生き延びる可能性につきもっと悲観的な見方を示している。前述の通り，アンデス世界の出身者が都市に移動した際，一代目においてはアンデス的なものが保存されるが，2－3世代を経れば西欧文化を基礎としたクリオーヨ文化に吸収してしまうと主張した。

このように，アンデス・ユートピアを主張した三者はともに，西欧化の前進を前にしたアンデス世界の状況に関して大きな危機意識を有しており，これがアンデス・ユートピアを提起した背景にあることが明白にうかがえる。フロレス・ガリンド自身が述べているように，アンデス・ユートピアは西欧化の波を前にした文化的抗争の結果としてアイデンティティを模索する努力の一環であったが，かかる危機から脱出する方法として，過去にアイデンティティを模索し，ペルー国民の中に残る理想化されたインカ社会への帰属意識を歴史の中に見出し，あるいはアンデス世界の者が堅持する「互恵」の精神や「共同労働」の習慣を，将来的なペルーの社会主義プロジェクトに活かそうと試みたと言える。

III. アンデス・ユートピア論に対する批判

フロレス・ガリンドが『インカを求めて』を出版して以来，直ちにアンデス・ユートピア論に対する批判が展開された。アンデス・ユートピア論に対する批判は，第一に「アンデス・ユートピア」をペルーの将来的な社会主義プロジェクトと結び付ける点，第二にアンデス世界と西欧文化との接触の中でアンデス世界が如何に存在しているかに関する点に集中する。

保守的な地域的クスコ主義の立場から，文化・精神面からメスティソ化に基づく「統合ペルー」を主張して「アンデス・ユートピア」を批判したのはタマヨ（José Armando Tamayo Herrera）である。彼は，1978年に『共和期クスコの社会史』，1980年に『クスコ・インディヘニスモの歴史』，1982年に『アルトプラノにおける社会史とインディヘニスモ』，1988年に『地域主義：神話か現実か，ナショナル・アイデンティティ：ユートピアか希望か』，1992年に『クスコ概史』を出版した。これらの著書において，植民地時代に溯って「インカイスモ（Incaísmo または Inkaísmo）」という用語を使用し，これを「インカ社会あるいはインカ体制を想起し理想化しようとする思想の集合体」，「すべてのペルー人，

特にアンデス出身者の精神的資産に転化しつつある生き生きとした永続的な思想の潮流」であると定義した［Tamayo 1992: 373］。タマヨはアンデス・ユートピアを「人種間の対立」をもたらすものであると批判するとともに，インカ社会の復活を無意識に希求する傾向も一部には存在することは認めるが，これによってペルー全体の問題に解決がもたらされることはないと述べる。またインカ社会を理想化してこれを社会主義プロジェクトに結びつけることは，センデロ・ルミノソが掲げる新民主主義論と混同される危険があると批判し，更にアンデス・ユートピア論の特徴の一つとして，政治化されている点を挙げ，これを「インカイスモの道具化」であると述べた。そして，「アンデス・ユートピア」に代えて，「インカイスモ」と「統合ユートピア (Utopía Sincrética)」を主張した。

更にタマヨは，フロレス・ガリンドが理想化されたインカ社会の復活をアンデス出身者が希求していると人類学的な実証なしに先験的に考えていると批判する。そして現在では先住民さえもがアンデス・ユートピアを希求している訳ではなく，インカ崇拝が神話として精神的に作用しているにすぎず，ましてや先住民も他の社会から孤立することを望んでいる訳ではないと述べる。タマヨにとって，アンデス世界出身者の都市部への大量移動の結果，ペルー社会において「チョロ化」とアンデス化が進行してきたが，これはアンデス・ユートピアではなく，アンデス的なものを基本的要素とする「統合ユートピア」を模索させる背景にあると論じる。彼はアンデス的なものをペルーのアイデンティティの基盤に求め，この基盤の上に他の諸要素をも取り込んだアイデンティティの形成を主張し，インカ崇拝が，先住民，メスティソ，チョロの相違を越えてインカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガに将来的なアイデンティティ表現を見出させることから，ペルーの将来はメスティソの勝利になると論じ，これが「統合ユートピア」であると主張した［Tamayō 1988: 145-160］。

タマヨの「統合ユートピア」は，ガルシア（José Uriel García）の「ヌエボ・インディオ（Nuevo Indio)」を想定していることから，人種的にはメスティソであれ，精神性においてアンデス的なイメージを抱いているものと解することができよう［Tamayo 1988: 160］。その意味で，タマヨは1940-50年代に本格化したアンデス世界からの人口移動がもたらしたペルー社会の変化が持つ意味を認識しつつも，ガルシアやバルカルセルが1920年代にクスコにおいて展開したインディヘニスモや「ヌエボ・インディオ」論の延長線上で現代ペルー社会を見ていると言えよう。

リベラルな西欧化論者の立場に立って，ペルーの将来的な社会主義化にも，またアンデス的伝統の存続可能性についても否定的な視点からアンデス・ユートピア論を批判したのはバルガス・ジョサ（Mario Vargas Llosa）である。彼は，1996年11月に『懐古的なユートピア：ホセ・マリア・アルゲダスとインディヘニスモの虚構』を出版し，その中でフロレス・ガリンドのアンデス・ユートピア論を論じた。バルガス・ジョサは，フロレス・ガリンドがアンデス・ユートピア論を展開した時代は，マトス・マルが「大衆の氾濫」と評した時代であり，

アンデス世界からの都市部への大量の人口移動が発生し，その結果ペルーの社会構造が本質的に変化した時代であると述べる。そして，ペルー社会の都市化と西欧化が1970年代に進んだ結果，先住民的なもの，懐古的なアンデス的なものは縮小し，ユートピアの社会的・文化的な存在空間は日に日に縮小していると述べ，インフォーマルなペルーが支配的となるとともに，「エスニックな文化的な相違は薄められ，アンデス世界のよき伝統が死に，近代性の恐るべきバージョンを代表するようなカオティックな社会が生じつつある」と述べる。

また，バルガス・ジョサによれば，アンデス世界を変化させる要因となったのは，まずベラスコ政権が行った農地改革であり，更に1980年に開始されたセンデロ・ルミノソによる武装闘争である。センデロ・ルミノソの活動は，先住民の脱インディオ化と伝統的なアンデス社会の解体をもたらし，伝統的なアンデス社会を近代的なペルーから隔絶していた障壁を粉砕した［Vargas Llosa 1996：329-330］。バルガス・ジョサによれば，「センデロ・ルミノソ」は，もたれているイメージに反して，古いアンデスのメシア論の現代的表現でも，ケチュア系エスニック集団の復権でも，インディヘニスモ運動でもなく，古い社会を新しい社会に代えることを目指す，マルクス・レーニン・毛沢東・ゴンサロ流の「文明化」論者である。センデロ・ルミノソの活動の結果，ペルー社会はインディヘニスモがかつて語ったような二重社会であることを捨て，文化的統合を進めた。新しく登場してきた文化はチチャ文化（チョロ層を起源として発生した文化）であり，新しいペルーである，インフォーマルなペルーが成立した。そして，このインフォーマルなペルーの中で，「元インディオ，チョロ，黒人，サンボ，アジア系が，ペルーにおいて初めて大衆資本主義と自由経済を発生させた」と述べる［Vargas Llosa 1996：331-332］。

バルガス・ジョサは，農地改革やセンデロ・ルミノソの活動で加速された，アンデス世界からの大量の人口移動がペルー社会に大きな変化をもたらし，都市化と西洋化が進むとともに，そのプロセスの中で社会のインフォーマル化が進み，その中から大衆資本主義が発生してきているとペルー社会の現状を説明し，その影でアンデスの伝統的な社会は解体されており，アンデス的なものが国民統合の核になりうる可能性は日々弱まっていると主張する［Vargas Llosa 1996：335］。バルガス・ジョサの「アンデス・ユートピア」批判の主軸は，リベラリズムの視点から，ペルーの近代化プロセスにおいてアンデス的なものは消滅してゆく運命にあるとの主張にあると言える。

他方，フロレス・ガリンド，ブルガ，モントーヤと同様に，ペルーにおける社会主義建設を主張しつつも，アンデス・ユートピアの虚構性を批判するのはデグレゴリ（Carlos Iván Degregori Caso）である。デグレゴリは，1970年代には左翼革命運動「第4期」派，1980年代初期には再統合した左翼革命運動「合流」（MIR-Confluencia），更に1984年に結成された統一マリアテギスタ党にも参加した知識人である。デグレゴリは1986年12月に刊行された雑誌『社会主義と参加』第36号に「インカリ神話から進歩の神話へ」と題する論文を，1993年には『アンデス諸国における民主主

義，エスニシティ，及び政治暴力』と題する論文集に論文「ペルーにおけるエスニック・アイデンティティ，社会運動，及び政治参加」を，また1995年には『ペルー1964-1994年：経済，社会，政治』と題する論文集に論文「他者の研究：ペルーにおけるエスニックに関する分析における変化」を掲載した。

デグレゴリは，「他者の研究」の中で，アンデス・ユートピア論に特徴的に見られる社会主義プロジェクトとの結合に関し，ペルーにおける左翼運動の中で，センデロ・ルミノソがロマンティシズムを否定して教条化と暴力化に進む傾向を強め，他方で革命的ロマンティシズムを捨てて社会民主主義路線へと向かう傾向との間の分裂が生じている中で，アンデス・ユートピアは革命的ロマンティシズムを掲げる最後の試みであるかのように見えると述べ，アンデス・ユートピアを革命的ロマンティシズムの表現であると位置づけた。[Degregori 1995：322]。一方，1993年に発表した論文「ペルーにおけるエスニック・アイデンティティ……」において，18世紀に「先住民ナショナル運動」が発生したことを認め，フロレス・ガリンドやブルガのようなアンデス・ユートピア論者が，このような運動の発生にインカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガの影響があると指摘した点を評価し，アンデス・ユートピア論者と同様に，1532年のスペイン人による征服から20世紀初頭までに発生した先住民系住民のインカ帝国あるいはインカ社会の復活を希求する運動や意識が存在したことは認めた。しかし，他方でアンデス・ユートピアが現在においてペルーのアイデンティティ模索に重要な役割を果たすことにも，またペルーの将来的な展望に繋がることにも否定的な姿勢を表明した。デグレゴリはその原因として，同じ論文の中で，ボリヴィアやエクアドルにおいてはエスニックなアイデンティティを表明する社会運動が存在するのに対して，現代のペルーにおいてこのようなエスニックな運動が生じないと述べた。そしてその理由として第一に「インディオ」なる言葉が19世紀の間の大土地所有の拡大を通じて「貧農」や「農奴」を表わす蔑視語の意味を増したが，このような大土地所有制に対する闘いは土地の奪還と教育を求める性格を強めたことから，階級闘争的性格を強めていったこと，第二に国家及び政府がこれら先住農民が「インディオ」という用語を拒否することを認めていったこと，第三に1960年代以降に左翼運動が強まる中で農民が階級闘争を扇動する左翼系のペルー農民連盟（CCP）や全国農民連盟（CNA）に組織されたために，エスニシティを基調とする運動が生じなかったことを指摘した[Degregri 1993：120-121]。

次に，アンデス世界における「進歩」の概念の浸透に関し，デグレゴリは1986年に発表した論文「インカリ神話から進歩の神話へ」の中で，市場経済の拡大，国家のプレゼンスの拡大，通信手段の普及によってアンデス世界の住民の生存条件が客観的に変容し，それが生活の変化をもたらし，更に意識の変革をもたらした事実を確認しなければならないと述べた。もし，このような現象を「進歩」と称するならば，19世紀半ばにはアンデス世界の一部に「進歩」の概念が生じていたと主張し，リマ県チャンカイ郡山岳部の例を挙げた*6。また，ア

ンデス・ユートピアの中にも，徐々に「進歩の神話」が混ざり込んでいると指摘し，「インカリ神話」の中に「学校（読み書き）の神話」が混ざったクスコ県ウルコスの例をあげる。デグレゴリは，「インカリ神話」から「進歩の神話」への変化により，過去を見ていた目が未来に対して向けられることになるとする。「進歩の神話」の浸透によって，インカ社会の復活願望は薄まり，学校，商業，賃金労働等の概念がとって代わる傾向が強まると指摘し，このような傾向はアンデス住民の都市部への移住によって更に促進されることになったと論じる［Degregori 1986：49-54］。更に，1995年に発表した論文「他者の研究」において，デグレゴリは，フロレス・ガリンドが『インカを求めて』においてアンデス世界の中に電気，道路，トラック等の近代的利器を受け入れる地域と，これをを受け入れない後進的地域が存在すると主張しているのに対し，アンデス社会の変化の中で，伝統と近代が，アンデスと西欧が，明確に対立しているような図式は存在せず，近代的利器に対する志向性は日々強まる傾向にあると反論する［Degregri 1995：317-318］。

そして，デグレゴリは，アンデス住民は都市部に流入することによって，近代化のコストとして差別から脱皮するためにアンデス世界で使用していた言語と衣服は捨て去るが，相互扶助，共同労働のような習慣や，音楽，踊り等の文化を維持するために，アンデス世界が都市部を征服していくかのような現象が生じると述べた。そしてこのような農村から都市への移動は，地域的アイデンティティが交流してゆくことで，ナショナル・アイデンティティの形成に寄与することになり，リマに地下の河が流れ始めるかのような現象が生じていると主張した［Degregori 1986：49-54］。こうして，デグレゴリは，アンデス・ユートピア的な志向性の存在には否定的でありながらも，地域的アイデンティティの克服という観点から，アンデス世界住民の都市部への流入によってナショナル・アイデンティティ形成が促進される点を指摘した。

Ⅳ．結び――1980年代アンデス・ユートピア論の評価

1980年代末から1990年代初めにフロレス・ガリンド，ブルガ，モントーヤがアンデス・ユートピア論を展開した。フロレス・ガリンドが主に思想論として，アンデス・ユートピアを基軸にペルーの社会史を再構成して見せたのに対し，ブルガは17世紀の先住民における意識の変化を歴史実証的に探求し，現在は18世紀のインカ貴族の後裔におけるアンデス・ユートピアの存在についての実証に努めている。他方，モントーヤは現代における人類学的フォローからアンデス・ユートピアの現代史的意味を考えようとしている。三人のアンデス・ユートピア論者は三者三様でアンデス・ユートピアにアプローチしたと言える。

彼らのアンデス・ユートピア論の特徴は，

＊6　デグレゴリが使用している「進歩」の概念は，「近代」を肯定的に受け入れる場合に一般に見られるものと同様の概念であり，「近代」論に見られる発展段階論を受け入れた上で，「近代」の肯定的部分として合理主義や先進技術を積極的に評価する姿勢を表現したものと考えられる。

まず第一に，アンデス・ユートピアをペルーの将来的な社会主義建設と結び付けたことに見られた。それは一方で，1920年代にマリアテギが模索した，ペルーの伝統に基づくペルー型社会主義の建設を継承する試みであり，更には1980年代における左翼勢力の大幅な伸長，及びセンデロ・ルミノソやMRTAによる武装闘争の拡大という状況の中で，ペルー型社会主義建設のプロジェクトをより明確に掲げる必要性に迫られたことが背景にあった。1970年代末から1980年代初め，ペルーの左翼勢力は1978年の制憲議会議員選挙以後の民政移管のプロセスの中で急激に勢力を伸張させ，軍事政権下で発生した内部分裂を克服していった。そして，1980年には，人民民主同盟（UDP，革命左翼運動「合流」，革命的前衛「エル・プロレタリア」派，革命共産党「赤い砦」派が中心）や革命左翼連合（UNIR，ペルー共産党「赤い祖国」派，左翼革命運動「ペルー」派，革命的前衛「共産主義プロレタリア」派，民族解放戦線で結成，革命共産党「労働者階級」派が同盟）等の左翼連合組織を媒介としながらも，ペルー共産党「統一」派，革命社会党（PSR），労農学人民戦線（FOCEP），社会主義革命同盟（ARS）を含めた左翼横断的な連合戦線である統一左翼（IU）を結成するに至った。しかし，他方で1980年5月にはセンデロ・ルミノソによる武装闘争が，また1983年1月にはMRTAによる武装闘争が開始され，左翼勢力がセンデロ・ルミノソやMRTAの武闘路線と，統一左翼の合法路線に分裂して混迷を深めていった。

フロレス・ガリンド等がアンデス・ユートピア論を展開し始めたのはこのような環境の中においてであった。特に，左翼知識人にとっては，ペルー型の社会主義路線を設定することと，活動を拡大するセンデロ・ルミノソに対して如何なる姿勢を示すかということが重要な問題となっていた。センデロ・ルミノソは現象的には種々のアンデス的特徴を示しながらも，表面的には極めて教条的にマルクス・レーニン・スターリン・毛沢東と連なるマルクス主義理論を掲げて世界的普遍性を強調することで，実態に反して擬似的に自組織のアンデス的特徴を否定し去り，結果的にはバルガス・ジョサが指摘した如く「近代化論」的姿勢を提示することになった。これがセンデロ・ルミノソの弱点の一つであったし，フロレス・ガリンド等が暗黙裡にセンデロ・ルミノソを批判し，ペルーの伝統に依拠する社会主義像を模索することに根拠を与えるものであった。

1980年代を特徴づけたもう一つの議論は，これまでにも指摘したように，1940年代から本格化した，アンデス世界からの人口移動を端緒として発生してきたペルー社会の変化に関する議論であった。そして，この議論の中でアンデス世界の伝統や精神性等が如何に残されてゆくかへと議論が進められる。このような議論の中で，アンデス世界が近代的利器の浸透によって西欧化の波に直面してゆく過程で，アンデス的なものが如何に将来のペルーに残されてゆくか，あるいは残しうるかが思念された。しかし，議論の展開はあくまで思念的で抽象的なものにとどまったことは否めない。

モントーヤは人類学的な実態調査を根拠に，社会主義プロジェクトと合流しうるア

ンデス的な要素として，「互恵」の精神と「共同労働」の習慣を掲げた。但し，モントーヤはアンデス世界には近代に対抗する姿勢は見られず，アンデス的なものは断片化してゆき，都市においてアンデス的なものの再生は断絶されると悲観的な見方をした。更に，ペルー社会の変化がアンデス的なものを破壊してゆくとの視点を示したのはバルガス・ジョサであり，デグレゴリはアンデス的価値観が「進歩の神話」にとって代わられると主張した。フロレス・ガリンドとブルガはこのような指摘に対して反論となりうるような議論を十分に展開していない。また，ナショナルな伝統が社会主義プロジェクトと融合する上での起動力につき，1920年代にマリアテギが「神話」と形容したのに対して，フロレス・ガリンドは「パッション」であると主張した。このような感性も極めて主意的なものであり，マリアテギ，チェ・ゲバラの系譜に繋がるラテンアメリカの社会主義思想に極めて特徴的な傾向を示していると言える。

おそらく，現実のプロセスは，モントーヤやバルガス・ジョサやデグレゴリが主張するように，アンデス的なものが断片化し，これに代わって「進歩の神話」が徐々に現代ペルー人の思考様式に影響を与えつつあるのが事実であろう。フロレス・ガリンド等のアンデス・ユートピア論は，ロマンティシズムとして見れば興味深いものであるが，実態論から見れば種々の矛盾や限界を有するものであることは確かである。マンリケが指摘しているように，インカリ神話についてはインカリの復活を肯定的に捉える説が存在するのみでなく否定的な説も存在するし，また「アタワルパの死」についても地域によってはスペイン人による征服を正当化する内容に変形している例もあり，これらをもってインカ社会の復活願望と主張することはできない。また，1910年代末から1920年代初頭にアンデス南部地域を席捲した先住農民反乱においてインカ帝国復活のスローガンが掲げられたことは半ば実証されているものの，1956-64年に激化した農民運動にはこのようなスローガンは全く見られなく，農民の意識におけるアンデス・ユートピアの継続性を見ることは不可能である［Manrique 1991 : 26-29］。マンリケが指摘した，アンデス・ユートピアの「汎アンデス性」の欠如と，インカ社会復活願望の農民運動における継続性の消滅は重要な点である。ブルガが指摘したように民衆劇「アタワルパの死」が今もアンデス農村地域で上演されていることや，またモントーヤが指摘しているようにリマ市内にインカリ伝説の新しい説が生まれていることから，アンデス・ユートピアが死滅したものではないことは事実である。しかし，今やインカ社会へのノスタルジーは存続しているとしても，それを政治的プログラムと直結させることは困難であり，そのような試みはロマンティシズム以外ではありえない。その典型がフロレス・ガリンドであった。

おそらく歴史的な視点としては，「アンデス・ユートピア」を革命的ロマンティシズムと見るデグレゴリの見方が正しいのではないか。インカリ伝説は，種々の説を現在もなお生み出しつつも「進歩の神話」に侵入されている。デグレゴリが指摘しているように，アンデス世界の人々は決して近代的利器の受入れを否定している訳ではな

かろう。コンピュータにせよインターネットにせよ，容赦なくアンデス世界出身の人々にも浸透してゆく。アンデス世界は市場経済と先進技術の進出の前には抵抗すべくもなく，価値観の変更をも迫られつつあるのが実情である。これはアンデス世界のみならず，世界のあらゆる場所で見られる現象であるともいえる。しかし，このような価値観の転換をも迫る，市場経済や近代的利器の進出を前に伝統的な価値観は如何にして守られるのか。アンデス世界住民の都市への移動によって，確かにアンデス世界の習慣や文化がリマ市などの都市部にも浸透しつつあり，表面的にはペルーのアンデス化が進行しつつあることも事実である。しかし，果たして，アンデス世界の伝統的な価値観が真にペルー全体に浸透しつつあるのであろうか。あるいは，近代性を装った西欧文化が「進歩の神話」として浸透しているのであろうか。アンデス世界の人々が「進歩の神話」に容易に影響されてゆくことが想像されるが，「進歩の神話」は単線的な発展史観に基づくのであれば，アンデス世界を支配していた循環的な歴史観と共存してゆけるのか。もし，「進歩の神話」が伝統的なアンデス世界の歴史観と両立しないのであれば，アンデス世界における自然と人間との間の均衡は崩れ去り，アンデス世界の歴史観も崩れてゆくのではないか。

ペルーにおいては，モントーヤが指摘するような「互恵」の精神，「共同労働」の習慣が伝統的な精神性や行動様式として伝えられてきた。このような先住民に独特な精神性は如何にして未来のペルーに活かされるのか。これは，ペルーにおいて未だ未形成のネーションが如何に形成されてゆくかとも関連する重要な問題である。最早，征服者の子孫であるスペイン系を中心とする既成寡頭支配層がペルーを支配する時期は終わっている。今や，本来のペルー人がペルーの主人公として活躍すべき時期に至っている。彼らが如何なるネーション・ステイトを建設してゆくのか。その建設の中で先住民の伝統的な価値観や精神性が如何に反映されるのか。1980年代のペルーにおいて生じた二つの議論，一つはペルー社会のチョロ化，アンデス化，インフォーマル化に関する議論，そしてアンデス・ユートピアに関する議論は，ともにナショナル・アイデンティティの模索に関わる問題であり，ペルー社会の将来像を策定してゆく上で，極めて重要な議論であった。

1980年代の議論において，アンデス・ユートピア論は西欧化に対する懸念の結果として，ナショナルなロマンティシズムとして掲げられた側面を否定することはできない。しかし，それが西欧化を前にした，ナショナル・アイデンティティの模索という努力を含むものであった点を見落とすべきではない。アイデンティティとは固定的なものでなく，時代の経過に従って，新しい時代の諸要素をも吸収・統合して変容してゆくものと見れば，「チョロ化」社会も過渡的には存在しうるのではないか。アンデス・ユートピアはこの「チョロ化」しつつあるペルー社会において，アンデス世界のアイデンティティを如何に残しうるかを目指す，極めてロマンティシズムに溢れる思想的営為であった。従って，当然ながらロマンティシズムであることに由来する限界を有する議論であったことは確実であるが，他方でネーション形成を終了しているとは

言えない現代ペルーにおいて，その基礎となるナショナル・アイデンティティの模索という重要な課題に挑む果敢な試みであった点を評価すべきであろう。1989年に始まった東欧社会主義圏の崩壊や1991年のソ連解体にも拘らず，社会主義思想の刷新努力はおそらく，これからも行われよう。アンデス・ユートピア論はネーション・ステイトの時代が終焉しない限り，ソ連型社会主義モデルの崩壊を越えた，ナショナル・アイデンティティの模索と，マリアテギが提起したペルー型社会主義の模索の試みとして評価され続けることになろう。

参考文献

Ansión Mallet, Juan

1987 *Desde Rincon de los Muertos*. Lima : Gredes.

Arroyo, Carlos, ed.

1989 *Encuentros : Historia y Movimientos Sociales en el Perú*. Lima : Memorangosta.

Bourricaud, Francois

1954 Algunas Características Originales de la Cultura Mestiza en el Perú Contemporáneo, *Revista del Museo Nacional XXIII* : 162-175.

1967 *Poder y Siciedad en el Perú Contemporaneo*. Buenos Aire : Ediotrial SUR.

1970 ¿Cholificación? *El Indio y el Poder en el Perú*. Lima : Instituto de Estudios Peruanos.

Burga, Manuel

1988 *Nacimiento de Una Utopía : Muerte* y *Resurreccíon de los Incas*. Lima : Instituto de Apoyo Agrario.

1989 El Nacimiento de la Utopía. In Carlos Arroyo ed., *Encuentros : Historia y Movimientos Sociales en el Perú*. Lima : Memoriangosta.

1990 La Emergencia de lo Andino Como Utopía (Siglo XVII), *Allpanchis* 35/36 : 579-599.

Burga, Manuel, Alberto Flores Galindo, and Rodrigo Montoya

1989 Conversatorio. In Carlos Arroyo ed., *Encuentros : Historia y Movimientos Sociales en el Perú*. Lima : Memoriangosta.

Cotler, Julio

1980 *Democracia e Integracíon Nacional*. Lima : Instituto de Estudios Peruanos.

Degregori, Carlos Ivan

1986 Del Mito de Inkarri al Mito del Progreso, *Socialismo y Participacion* 36 : 49-56.

1993 Identidad Etnica : Movimientos Sociales y Participación Política en el Perú. In Alberto Adrianzen ed., *Democracia, Etnicidad y Violencia Política en los Paises Andinos*. Lima : Instituto de Estudios Peruanos.

1995 El Estudio del Otro : Cambios en los Analisis sobre Etnicidad en el Perú. In Julio Cotler ed., *Perú 1964-1994 : Economía, Sociedad y Política*. Lima : Instituto de Estudios Peruanos.

De Soto Polar, Hernando

1986 *El Otro Sendero*. Lima : Instituto de Libertad y Democracia.

Domínguez, Víctor

1988 *Heróica Resistencia de la Cultura Andina*. Huanuco : CREA.

Espinoza Soriano, Waldemar

1987 *Los Incas : Economia, Sociedad y Estado en la era del Tawantinsuyo*. Lima : Amaru Editores.

Flores Galindo, Alberto

1986a *Europa y el País de los Incas : La Utopía Andina*. Lima : Instituto de Apoyo Agraria.

1986b *Buscando un Inca : Identidad y Utopía en los Andes*. La Habana : Casa de las Americas.
1988 *Tiempo de Plagas*. Lima : El Caballo Rojo Ediciones.
1989a El Rescate de la Tradicíon. In Carlos Arroyo ed., *Encuentros : Historia y Movimiento Sociales en el Perú*. Lima : Memoriangosta.
1989b Redescubriendo lo Andino. In Carlos Arroyo ed., *Encuentros : Historia y Movimientos Sociales en el Perú*. Lima : Memoriangosta.
1994 *Buscando un Inca : Identidad y Utopía en los Andes*, 4-ta ed. Lima : Editorial Horizonte.

Flores Galindo, Alberto and Mauel Burga
1982 La Utopía Andina, *Allpanchis* 20 : 85-101.

Flores Galindo, Alfredo, Manuel Burga, Wilfredo Kapsoli, and Juan Martínez A.
1996 Mesa Redonda : La Utopía Andina. In Wilfredo Lapsoli ed., *Modernidad y Tradición : Perú siglos XVI-XX*. Lima : Editorial Lumen.

Franco Cortes, Carlos
1985 Nación, Estado y Clases : Condiciones del Debate en los 80, *Socialismo y Participacion* 29 : 1-18.
1991a *La Otra Modernidad*. Lima : Centro de Estudios para el Desarrollo y la Participacion.
1991b Exploración en "Otra Modernidad" : De la Migración a la Plebe Urbana. In Henrique Urbano ed., *Modernidad en los Andes*. Cusco : Centro de Estudios Rurales Andenos Bartolomé de las Casas.

Garicía, José Uriel
1930 *El Nuevo Indio*. Cuzco : Editorial Rozas.

Guzman Reynoso, Abimael
1988 (July 24) Presidente Gonzalo Rompe el Silencio : Entrevista en la Clandestinidad, *El Diario* No. 496 : suplemento.

細谷広美
1997 『アンデスの宗教的世界』明石書店。

Kapsoli, Wilfredo
1984 *Ayllus del Sol : Anarquismo y Utopía Andina*. Lima : Asociación de Publicaciones Educativas.

Manrique, Nelson
1988 *Yawar Mayu*. Lima : DESCO.
1991 Historia y Utopía en los Andes, *Margenes* 4(8) : 21-34.

Matos Mar, José
1984 *Desborde Popular y Crísis del Estado : El Nuevo Rostro del Perú en la Decada de 1980*. Lima : Instituto de Estudios Peruanos.

Millones, Luis
1992 *Actores de Altura : Ensayos sobre el Teatro Popular Andino*. Lima : Editorial Horizonte.

Montoya, Rodrigo
1987 *La Cultura Quechua Hoy*. Lima : Hueso Humero Ediciones.
1988 *Quienes Somos : El Tema de la Identidad en el Altiplano*. Lima : Mosca Azul.
1991 La Utopía Andina, *Margenes* 4(8) : 35-74.
1992 *Al Borde del Naufragio : Democracia, Violencia y Problema Etnico en el Perú*. Lima : SUR Casa de Estudios del Socialismo.
1993a La Imagen de la Colonia y de Si Mismos en los Intelectuales Quechuas, *Alma Mater* 6 : 53-68.
1993b El Teatro Quechua Como Lugar de Reflexion sobre la Historia y la Política, *Revista de Crítica Literaria Latinoamericana* (*XIX*) 37 : 223-241.

Montoya, Rodrigo, Edwin Montoya, and Luis Montoya
1987 *La Sangre de los Cerros*. Lima : CEPES.

小倉英敬
1983 「アンデス・ユートピア思想の系譜」『ビラコチャ』3: 12-13。
1996 「現代ペルーにおけるナショナル・アイデンティティ問題：チョロ問題の検証」『イベロアメリカ研究』XVIII(1): 43-60。
Quijano, Anibal
1980 *Dominación y Cultura : Lo Cholo y el Conflicto Cultural en el Perú*. Lima : Mosca Azul.
Rostworowski de Díez Canseco, María
1987 *Historia del Tawantinsuyu*. Lima : Instituto de Estudios Peruanos.
Tamayo Herrera, Jose
1978 *Historia Social del Cuzco Republicano*. Lima : Industrial Grafica S.A.
1980 *Historia del Indigenismo Cuzqueño Siglos XVI-XX*. Lima : Instituto Nacional de Cultura.
1982 *Historia Social e Indigenismo en el Altiplano*. Lima : Ediciones Treintaitres.
1988 *Regionalización : ¿Mito o Realidad? e Identidad Nacional : ¿Utopía o Esperanza?* Lima : Centro de Estudios País y Región.
1992 *Historia General del Qosqo : Una Historia Regional desde el Periodo Lítico Hasta el Año 2000*. Qosqo : Municipalidad de Qosqo.
友枝啓泰
1988 「ペルーのインディオと国民的アイデンティティ」川田順造・福井勝義編『民族とは何か』岩波書店。
Urbano, Henrique Oswaldo
1977 Discurso Mítico y Descurso Utópico en los Andes, *Allpanchis* 10 : 3-14.
1981 Del Sexo, Incesto y los Ancestros de Inkarri : Mito, Utopía e Historia en las Siciedades Andinas, *Allpanchis* 17/18 : 77-103.
1991 Modernidad en los Andes : Un Tema y Un Debate. In Henrique Urbano ed., *Modernidad en los Andes*. Cusco : Centro de Estudios Regionels. Andinos Bartolome de las Casas.
Valcárcel, Rosina
1988 *Mitos, Dominación y Resistencia Andina*. Lima : Universidad Mayor de San Marcos.
Varallanos, José
1962 *El Cholo y el Perú*. Buenos Aires : Imprenta Lopez.
Vargas Llosa, Mario
1996 *La Utopía Arcaica : Jose María Arguedas y las Ficciones del Indigenismo*. Mexico City : Fundo de Cultura Economica.
Varon Gabai, Rafael
1990 El Taki Ongoy : las Raices Andinas de Un Fenomeno Colonial. In Luis Millones comp., *El Retorno de las Huacas*. Lima : Instituto de Estudios Peruanos.